

# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2016.11



平成28年11月1日発行(毎月1回1日発行)第64巻第11号

No.702

# 地中海

二〇一六年二月号(通巻七〇二号)

## ◇今月の二十首詠……夏

高橋啓子 2

## ■作品

辻 彌生・塔原武夫他 4

A 田井千恵子他 24

B 滝口智枝子他 64

C 柄目けい子他 80

A 伊勢玉枝他 98

## ■オリーブ集

鈴木文子他 52

□糸杉集 滝田靖子他 58

◇今月の二人 小野泰子・今井マチ子 16

■特集・モノ語り [責任編集] 高尾恭子 15

カミのものがたり 倉田 剛

本との出会い 田口紀久子

黒染に恋して 中村恭子

ものができていく過程 高橋啓子

## ■上石幸子歌集「母の子守唄」批評

48

明けぬ夜は無し 白子れい

明るく生きる 松浦禎子

◇シルクロード・カフェ (責任編集) 木村文子 62

私と短歌との出会い(171) 末次昌子 47

■歌壇月旦 磯田ひさ子 61

一つの賞から

■九月号作品批評 86

A……………田土成彦・千葉む津

B……………田口紀久子・高原 桐

C……………木村恵子・西畑睦子

市原やよひ・松瀬トヨ子

オリーブ集……………牧 雄彦

糸杉集……………関根和美 94

久我田鶴子 96

今月の二人・作品評 (編集部) 79

最近の歌誌より

クリップ……………78 神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuzo

## 夏

高橋 啓子

昭和三十五年生まれ。  
昂グループ所属。

夏の昼実った稲穂をわれ先と群れぶら下がりすずめがついばむ

群すずめ案山子もわなも縁がなく男はひとり稲を育てる

この夏も肌の日焼けに構わずに稲を育てる男の日常

いのししの侵入避けの柵の中無農薬の米が育つ

手間をかけ育てた稲が穂を垂れて晩夏の風にしずかにゆれる

畑に行く回数が減る父と二人夏の暑さを言い訳にして

温度計三十五度を越える昼窓全開のふるさとの夏

物騒ということばは無縁にして窓開け放し暮らす夏の日

亡き母の誕生日の朝しゅるしゅると蛇あらわれて横切つて去る

夏の朝人を呼ぶ声へび嫌い私の中の母の遺伝子

真夜中の不穏な音に目覚める 玄関近くにいのししがいる

来年は戻ってくるのか子つばめが真夏の昼電線に並ぶ

草を抜く私の手元をはねまわるかえる一匹が池に飛び込む

玄関の扉の角に挟まれてまだ柔らかい守宮の死骸

夕暮の空見上げれば声もなく影絵のようなこうもりの群れ

帰京する日が近くなる夏のおわり赤とんぼの群れ田の上を飛ぶ

岡山発上りの電車のひとり旅窓を濡らして天気雨降る

冷房の効き目心地良く日焼けした少年たちは車内に眠る

五時間の乗物移動冷房で冷えた体をあたためる酒

にわか床屋腕に覚えはないけれど夫の髪を三ミリに刈る

# 作品

## A

辻 彌生 睡魔 ・春

おそいくる睡魔とあらがい書く日記たのしき思い出おくり火にのせ  
日陰にと植えしキウイの棚の下実をかぞえつつねむりておりぬ  
おとろえし氣力体力われのもの感謝感謝の咒文を唱う  
のこされし命をつなぐ遊びごと祈りの作法われは人間  
目のおくがじりじり焼かれているごとし記憶の消されて八月の尽  
齒軋りをするも入歯は力無し八十八年来し方おもう  
終戦日玉音ききしわれ十八歳かの日のことはいまもあざやか

塔 原 武 夫 遠き夏 ・湾

ゆさゆさと葡萄は青く実をゆすり夏へと入りゆく遠き夏へと  
戦いの記憶たしかに夢と顕つ思えばわれもいくさに組みし  
抜く草の放つ匂いよ土に伏し戦車を待ちし少年たりき  
人を殺むニユース増えるはもしかして人類を裁く地球の意思や  
文明を誇れる国に襲いくるテロと言う名におののきおりぬ  
寸土をば争う国々これもまた欲望ならん言葉かざれど  
鳴々と声吐きて何をばまさくらん夜のやみに覚め空をばつかむ

虎 谷 信 子 悼む ・伴

離りぬしままの 友の計とどく朝、ただ悲しくて独りぼつねん  
化粧地蔵まつり祈らな 友のため、子供ら導きし 一生なりせば  
「名張さん覚えていますか」ガリ版で初めての歌集あすか作りし事  
女学校とふさやけき学び舎 師と共に、歌詠む青春の日日の篤さよ  
ニュータウン桜満開 まねかれて、美酒たしなむ君ほからほからと  
今はただ安らかにあれとご世にて、終焉の日は「イロウ」なりせば  
地蔵盆ささめく子らの声もなく、れんげ田も舞ふ蝶も今はまぼろし

高 尾 恭 子 半世紀 ・大

白いギターをかかえた少女まぼろしとデビュー五十周年の森山良子  
巨視的にみれば一炊サイゴンの陥落もJTBバックツアーム  
戦争の地図をぬりかえサイゴンのワー君大阪の教壇に立つ  
下二段活用おぼえる子ら乗りてそういえば考査の始まる七月  
セーラー服の女子おとこさらう曾根駅に「阪急電車」のつづきを探す  
この夏をあえぎあえぎて故郷の母は鰻丼ふた口食みぬ  
子をひとり生んでよかった盆明けの日照りまぶしく蒲団を干しぬ

高津砂千子 西瓜 風

あさ早き空地にひろがる朝顔のうすきむらさき湿りを帯ぶる  
 時いたはずなきが西瓜の芽生えきて蔓伸ばしゆく夏のはじめに  
 ある日ふとピンポン玉の大きさの西瓜の果をば見つけたりけり  
 あさなゆうな声かけ水やり欠かすなく庭の西瓜の育ち見守る  
 枯れ草を敷きて西瓜の果を乗するはじめてなれば思いつくまま  
 ひよどりに喰われてならじと太りゆく西瓜に似合うザルかぶせゆく  
 庭に生りし小玉西瓜はずっしりと手に重みあり酷暑を越えて

高橋和代 一筋の道 桃

姉 兄と順<sup>ず</sup>逝りしてただ一人残れる妹もながく遠住む  
 内海のへだつる街に住み古りて互ひに一人の旅のかなはぬ  
 甥の息子の所用のついでと誘ひくれ久びさに瀬戸の海を渡りぬ  
 瀬戸大橋成りて互みに訪ひるしも五十年経れば夢のごとしも  
 大橋の下への島 島縫ひつづく一筋の道いま駈けてをり  
 へだてゐし海の上に脚おろしし日 恋しき人に逢ふがに弾みて  
 月の出を待てる逸りを鎮むるや薄くれなるの褥敷き出づ

竹下妙子 秋色 霧

天の川白鳥座より鮮やかに南の空のさそり座に落つ  
 夜の更けて南の空にさそり座は尾を逆立てて沈みゆきたり  
 鷺あまた水辺に降りて里川の朝の光は嘴に煌めく  
 蛸の見えざるものに和して鳴く滝となりつつ吾が背なを打つ  
 朝顔も夕やみも同じ鬱の色そのあはひにてかなかな啼きめ  
 夏逝きて静けさ疾しゆぐれの背な包みるる秋風の沁む  
 白粉花・花魁草・夕顔の宵闇に咲き何をささめく

田土成彦 秋立つ 宙

秋立つと夜の窓開けて聞きとむるいのちひそめて鳴く虫の声  
 暑氣すこしをさまりし夜を鳴き出づる草むらことに声を違へて  
 体液を送りつつ翅揚げゆく急がず休まず蝶になるため  
 時来れば八月二十日虫は鳴くエアコン室外機横の草むら  
 エイリアンの博物館にはピン留めのヒトの標本があるのだらうか  
 故由は知らず窓から飛び出した黄金バットのくくみ笑ひす  
 『風たちぬ』教科書に読みしこと思ふ五十年経てよみがへること

田土才恵 五山送り火 宙

降りやまぬ篠突く雨にさえぎられ大文字の灯ついに見ずなり  
 おおかたは諦め去りし人の波いま浮かびこし舟形の灯の  
 篝火の揺れはかすかに見えきたり篠突く雨の小止みいっとき  
 ずぶ濡れとなりし足元舟形の灯のあらわれてひとり声上ぐ  
 舟形に少し遅れて見えて来し左大文字雨なかに燃ゆ  
 七十週かけてロボット組み立てし君の心に少年が居る  
 この夏の暑さ猛たりイヤリングひとつはぐれてどうしようもなし

中島央子 鱒 森

いつの世の溶岩ならむ開拓の農場<sup>見守</sup>するすがたに残る  
 山道を養鱒場へたどりつく富士湧水池に暑さを知らず  
 湧水池かこむ大杉垂直の肌<sup>肌</sup>上はいづれも苦むしてゐる  
 釣竿を借りれば入れ喰ひたちまちに七匹の鱒浮世にあらがふ  
 餌のない針にかかりて三匹の鱒は浮世にうろたへ騒ぐ  
 釣りあげし鱒の塩焼わが鱒を食うてくれそな湧水そだち  
 湧水に育つる鱒の突然変異黄色いうろこに目玉の赤し

## 中島 義雄

颱風迫る

・岡

あぎとへる鯉の頭に波立ちて颱風迫る暗き水の面  
 錆びて立つ警鐘台の上の空雲行きは颱風の流れとなりぬ  
 おろおると田畑を巡る農夫らも稔りし稲も強風が押つ  
 下校急ぐ児童らの列乱れつつダム放水のサイレン響く  
 しんしんと月を包みて雲うごき風は高圧線を鳴らしぬ  
 颱風は洋上に去り鰻屋の鰻焼く火が裏戸より見ゆ  
 風去りぬ水は足りたり生きめやも妻の退院の手続きにゆく

## 白子 れい

千日詣り

・洛

前うしろ異国のことばとび交えり内々陣の開くを待つ列  
 内々陣に一步入れば身の緊まる清浄の界みほとけの界  
 須弥壇の上なる厨子に対峙して五色の綱に結ばるる御縁  
 千手観音は三十三年に一度出でたまう亡き師と曾て仰ぎし日あり  
 ジーゾーとあたりかまわぬ蟬の声足下よりくる清水寺の舞台  
 深みどりの木の葉ゆらして吹きあぐる風を吸いおり舞台に佇ちて  
 今年また千日詣り果したりお札に托す仏の恵み

## 橋本 曠子

訣れ

・伴

耐へがたき 八月旬日、友逝くとふ 知らせを受けて、独り哀しむ  
 学び舎に 机並べし杳き日日、想ひてしばし刻を忘れぬ  
 朗らかなる声高らかに先に立ち、友を誘ふ ひとでありしが  
 読書好き、片時の間も放さざる 本の数々われら教はる  
 近江師に躓きて学びし、伊勢、萬葉、源氏語りに 二十年の余を  
 沖繩の旅とも共 ひとそかごと お酒の席の賑やかなりし  
 消息を聞かずに過ぐす 二年余、ひとり悔やみて 詮方もなし

## ばばりょうこ

狐の嫁入り

・鹿

ひなた雨にいきなり降られたそのせつな狐の嫁入りをまぼろしに見る  
 角隠し 袴 紋付きに 添う供ら 雨止むまでの華やき幻想  
 ひなた雨 通り雨 はた 日照雨 妖しき風情に陶然とする  
 野の道に燦と降りたる雨なれば黒沢明の映像の世界  
 銀色にかがやきて降る日照雨なか傘はささずにはばしたたずむ  
 息ひそめ見入るけはいを感じたか狐の夫婦キツと振りむく  
 陽を射して雨はあやしく降りて止む嫁入り行列過ぎたるよしか

## 浜谷 久子

ひとり旅

・地

六歳の一人の旅の始まりは伊丹空港向かう山形  
 アテンダントのお姉さんに会う楽しみも乗り込む飛行機六歳の旅  
 六歳の意気揚々の出発を見守る大人の不安と安堵と  
 万全の迎え体勢米沢の祖父母が孫を飛行場へと  
 十円玉でかける練習駅前の公衆電話がわが家に繋がる  
 米沢の往来どこにも見当たらないと遅れてかかる公衆電話  
 お祖母ちゃんにしっかりと叱られ帰りに来る六歳すでにからりと忘れ

## 浜本 芙美

君の声

・夢

コスモスを溢るるばかり壺に活け咲き咲く遠き里の風きく  
 次々とうつむき花をたたみゆく秋桜の花終までかなし  
 海の上まだ勢いをもちながら夏の終りの雲立ちあがる  
 内海を越えて聞こゆる君の声「あなたのは何でもできたよ」  
 若き日は「死」とう言葉の美しく今は諦念となりて切なし  
 人間が丸くなるとは或る意味で狡猾につながる思いのよぎる  
 冷蔵庫に何しにきたか思いだせず戻ると友の言うを笑えず

## 檜垣美保子

晩夏

・鼻

一房の葡萄を等しく分けあいておさなご四人ならぶ夏の夜  
失なつてゆくものなにもないような一歳の孫歩きはじめ  
去りゆきし幼な夏のかげのこし玄関にかわく砂と小石と  
人ら去りプールサイドのぬれており黒揚羽きてたわむるごとし  
しきり鳴く若き鴉の一羽いて鋼板の屋根を跳ね移りゆく  
午後の雨きまぐれにきて過ぎにけりつくつく法師鳴きはじめたり  
一階のははのカーテン引く音が二階のわれのきょううのはじまり

## 福田庸子

舟石坑跡

・今

両岸の樹樹のみどりのおもおもと歳月なして毒を消しゆく  
百年をしみて山肌くだりくる水は沢ごとに色を違へり  
沢に立つ樹木の張りにひそみつはぐれ鹿草を無心に喰みて  
人間を見つけし刹那時を止む尻の白さがきはまりゆくも  
明治期を殖産事業と山に入る市兵衛が見つけし舟型の石  
舟石の置かるる奥に銅を掘る坑口あらむ叢の果て  
中央のくびれが心地よきらしき幼児いつまでも舟石に遊ぶ

## 藤川和子

四年後

・眉

盃盞盆会み魂もとほく還りしや満月の庭夜香木匂ふ  
風鈴の音色かそかに運びくる没りつ陽の方ゆ亡き友のこゑ  
うす黄いさくら病葉降りかかる晩夏の川風まだなまぬるく  
唇にこもり祭り火花も音のみにのほりつめては己れ放たむ  
もえ尽きしリオの五輪のフィナーレ此の世の見納め言交はしつ  
四年後の生は望めずさはされどスパーマリオやはたドラエモン  
メダル数過去最多なり東京へ五輪フラッグ打ち振られたり

## 藤田美智子

花束

・新

かたくなりある理由を知りつつ持て余す心を手のひらの上に転がす  
似たやうなことがどこかであつたはず刺きて知りたる桃の傷みと  
人ひとり許せぬわれにくださいな強く匂へる百合の花束  
許せばきつと楽になるはずでもただけでそれでも解れぬ心を抱く  
削げ落ちたる石仏の顔の眼のあたり日の暮れにわづかな窪みを見せる  
顔も手も削げ落ちたるままの石像がわづかつわが肩を下げゆく  
汚染土を除去土壌を書くまやかしを許して福島島の夏は過ぎゆく

## 船田清子

白と青

・天

つねのごと「待つて……」と追へるわれを置き黄泉坂とつとくた  
法名は「法船院……」とぞ法の船斯岸・彼岸を漕ぎ渡るにや  
線香の煙と共に昇りゆく魂ならば煙はたてず  
わが横は君の定席いつにても共にゆかまし遺蹟をめぐり  
ふるさとの隠岐の白鳥岩の白海面の青や君が乳たる  
夢にだに君の笑顔に逢はむとぞ散骨を欲る隠岐の海風  
晩夏の鎮もり深き真昼間を君待ち待ちし香き日ながら

## 牧雄彦

ローカル線

・大

日本にふたつのみとふ星形の城趾に学校が深閑と建つ  
学生のころに戻れる思ひせりローカル線にひとり旅して  
信濃路の夜をゆく車窓に映りある老いづくおのが顔にうなづく  
下車するはわれ一人にてタクシーの若き運ちゃんひたすらしやべる  
行く人の絶えたる午後山道の道を揚羽がわがあとを追ふ  
急峻ななだりに暮らす下栗の里夕映えて人の影見ず  
再びは訪ふことなからむ山里にかはづの音が闇を伝ひ来



## 松浦禎子 納む

・羊

不忍池をめぐりて日もすがら群れる人びといくさなき世に  
お花見の今日をさかりのさくら通り肩ふれ合える人みなえみで  
弁天堂をまっすぐ過ぎてと地図示し動物園前のポリスも親切  
岩崎邸小暗き坂をのぼりゆく何者でもなきわれ傘寿となりて  
彌太郎のいかつい写真しみじみと明治の顔ぞいまは見るなく  
バルコニーより響くテノールのカンツォーネ芝生の上を風のごと過ぐ  
彦彌太郎跡地に建ちし史料館男の本懐静かに納む

## 松永智子

光芒

・嵐

にんげんのごとくして長月の空にひととき落日の燃ゆ  
なにごとくもあらず昏れたり光芒のはてたるのちのあはき浮雲  
ゆくりなく見上げて立てり夕茜ものいふことのなくて日のくれ  
ひとりしるよろこびとして見て立てり九月の空のあはき光茫  
生れし日の空の色はしらずしてけふ落日の空ふり仰ぐ  
高ければ明るければ見上げ立つなにごとくもなく長月の空  
光芒のながくのこれる茜空ひとひの終りまたしづかなり

## 三浦好博

波の花

・銚

伏流水ここに来て湧く梅花藻の揺るる小川ゆ水汲みにけり  
湯の宿の開き鏡その底に映りて眠る結婚記念日  
人気なき夕映えの丘白々と風を映せるカーブミラーは  
海見ゆる園に遊びし家族連れ去りたる芝に光とどまる  
荒れ狂ふ屏風ヶ浦の波の花はなからはなへ我は蝶なる  
しろがねの雫もろとも桑の葉を食める蚕のごとき病む我  
コスモスの花一斉に頷きて野分の気配に身構へをりぬ

## 宮本靖彦

リオ・オリンピック

・凌

天恵の豊かなるリオ・オリンピック苗木もつ少女選手誘導す  
難民選手四十余名の入場を観衆十萬総立ち迎ふ  
インディオの舞レース編み奴隷史に歴史を見するリオ開会式  
平生は形競ふ足今リオに駆け跳び闘ひ脚はよろこぶ  
夜空埋めし十萬観衆幕下りて五輪旗は今小池さんの手に  
淀川の流れを交へし毛馬閘門鉄門の紙明治を語る  
青芒ざわめく河原雲低く逆白波に雨後の淀川

## 三好聖三

人形

・伊

安倍某は中原中也が好きかしら長州生まれのこのやぐれを  
家族とは悲しい器といまさらにも思うあさあけ蛇が乾ける  
伝わらぬことはあたりき蟻たちが桜の幹を上り始める  
溶ける骨砕ける身体の結束を首都東京の片隅に見る  
四面楚歌などもよろしき東京の朝を強き雨は降るなり  
人形のように過ごした昨日今日西の山部に月がまどろむ  
土の面穿つ彼方の面々のなかのひとりに和泉式部は

## 御代田澄江

蟬の宿

・茨

山百合の花言葉薔山百合に逢はで久しも逢ひに行きたし  
花を求め長旅の途路辿り着く黒蝶か庭を舞ひやがて消えゆく  
どこか可憐で優雅なる湖上の諏訪湖火花戦死者鎮魂とふ終戦記念日  
焼夷弾の記憶を亡夫言ふ夏火花ベランダに並び観てゐし夜も  
ふいに高き蟬の鳴声限りの命燃やすに百日紅宿を貸しをり  
ゆかた地の直線裁ちのワンピース我も着たりぬくらしの手帳読み  
吾娘高校時蒙州留学前日にもう一度食べたいと言ひしは手帳の料理

もとむらしげと

言葉

・そ

狼と呼ばれる選手のインタビュー聞きて優しき人柄に惚れる  
先生は私の名前を知っていますかと問う生徒あり放課後の廊下  
おすおすと部屋に入り来て部顧問の言葉の暴力話し始めぬ  
どうしても集まってしまふ子供たち符を持ってお喋りに夢中  
美しきことば並べし憲法草案に個人は消えて国家はびこる  
ミサイルだ領海通過だと煽られて戦争法になじみゆく不安  
妻の手を離しマイクに向かいたる英国首相は職を辞すと語る

八乙女由朗

想定外

・柴

想定外のカミわざ見せんか台風十号われらめがけて上陸せんとす  
また来るか自然のおろす鉄槌が、空見やりつつ家うちに入る  
雷神の性はいつしか偏屈になりて暴れぐせ止まぬ台風  
忙し世はスゴさを競うものばかり草刈らんとす草もジャングル  
日本菊の際に朝鮮菊植えて水やり続くに朝鮮菊難し  
ガス鉄砲、案山子の要らぬ田づくりは黄ばむ稲穂に雀が群るる  
のうのと過ごしおりなば日は落ちて良い知恵あらぬこれも想定外

山下雅子

みのり

・習

土割りてのぞくみょうがのみずみずし独りに見合う爽りの菜味  
この町のけやきと共に五十年幹を覆える苦はぐくめり  
槐の黄散れる木の下ほのほのと明るむ車道に沿うひととこ  
たんねんにみじん切りする手元より母の仕種のふともあらわる  
なにげなくのぞく鏡にうつる顔母かと紛う白髪まじりも  
膝の上に静脈あらく浮き立つ手ましな左をそっとのせたり  
それぞれの幼さあれど育ちゆくものの活気にたじろぐばかり

横田敏子

涙の五輪

・福

リオの街コルコバードの丘に立ち五輪を見守るヤキリスト像は  
競泳の個人メドレーの金メダル萩野選手が先陣を切る  
鉄棒の完璧着地で逆転の内村選手の白き齒ぞ美し  
バドミントン決勝戦の高・松ペア無心の力が奇跡を起こす  
卓球の愛ちゃん思わず咽び泣く三人娘の結束の銅メダル  
平伏して肩を振るわす吉田選手四連覇のプレッシャーいかばかりならん  
三冠のポルトも認めるバトン渡し四〇〇リレーは衝撃の銀メダル

吉内尚彦

化粧品売り場

・浜

この爺に何の用ある化粧品売り場へわれは引き込まれたり  
男性の一人も居ない売り場内われはキョトキョト落ち着かぬまま  
「肌年齢八十八歳この化粧水を使えば若返ります」  
男性も日傘が欲しき八月の予報は七つの暗れマーク  
買う気なき鮮魚売り場をゆっくりと三度巡りて汗を乾かす  
菜園に忘れられても葱坊主日照りに負けず草にも負けず  
苦しきを力となせとの参道のことを胸に書きとめ登る

吉永惟昭

病棟

・熊

肺炎と脳梗塞に別れて同じ病棟 夫婦善哉  
旧シベリア抑留の人唄びつつする粥さえ食べ残している  
震災に毀れたる墓遥拝す病窓おだし八月の盆  
真直ぐ立つ秋気の噴煙遠阿蘇はもう夕すげか妻のふるさと  
煙りいる雁回の峯うとしかり夕立ならん母生れし里  
頻尿を訴え老化現象と片づけられし今日の一  
熊本の小さな小さな文学史書き留めおれば更くる病棟

朝井恭子

モンステラ

・森

台風の去りたるのちの夏空に蟬族ごぞりて命を謳う  
 久久に会いたる友と互みにも健やかに在る今をうれしむ

「三万年前の水」にて一杯の珈琲を淹れひと日始まる

緑濃きモンステラの葉に穴あきて破れ団扇の風情となりぬ

モンステラの気根鉢よりはみ出だし細ほそ垂るを痛ましく見る

ほろほろと槐の花を地に零し秋めく風の夕べ立ちくる

散りしける槐の花を幼児は小さき靴にそろそろと踏む

飯田 勤

勞苦

・む

床を跳ね宙に躍りて着地する体操選手の妙技あざやか

卓球の鋭き打ち合ひ息を飲み勝利のポーズに心和みぬ

全力の走りの中でつなぎたるバトンタッチに胸熱くする

跳び走り水中競技や格闘技選手の奮闘心にきざむ

Uターンの颯風十号北国に襲ひかかりて猛威ふるふと

濁流がドアを破りて足弱き人々襲ひしニュース痛まし

営々と労苦重ねて実りたる畑流されし無念を想ふ

石橋美年子

秋明菊

・華

鉛筆と紙さえあればの歳月を詠みたる歩みは疲労困憊に

大会に参加せしころは我武者羅にそれぞれの声遣して逝きたる顔の

朝焼けに浮かびし言葉うちはらう一日を生きるか一日が在りしか

挨拶は世話になりますと頭さげ世話になりしと別れゆく何時か

仙人草真っ白に群れ咲く朝の空ゆく雲ははや秋雲にして

仙人草隠せる猛毒しりたるも真っ白に咲きて秋は来たりぬ

亡き友の秋の便りの挨拶は 秋明菊が咲きはじめたよ

磯田ひさ子

雉鳩

・森

青墨にひと刷けの朱をのぞかせる雉鳩寄り来て何をか突く  
 雉鳩のくぐもるこゑをいちはやく「でつぽうぼう」と聞きし人はや  
 とりがなくあづまの国にペランダを移りつつ棲む二羽の雉鳩

無機質のコンクリートの屋上に人は育む秋の七草

大木に鳥の棲むごと高層のビルにあまたの家族が暮らす

うちつけの風乱がはしあさがほの鉢が転がる雉鳩が去る

あさがほの鉢は支へを失へり 父母亡きのちの実家は遠し

市原志郎

淋しき日々

・萬

この暑いのには孫ら二人は外で遊ぶ外国より帰つて来たばかりなのに

シャワーなど浴びてようやく席に着くこの一日は土いじりして

かつて妻は乳母車おすそして今車椅子おす申し訳なし

診察室の扉にむきて背中ばかり待合室にわれもその一人

つるのみが伸びた朝顔ようやく白きつぼみが見え始めたり

孫むすめの誕生日なりとチョコレート一杯のケーキ届けられたり

キラリ光る針先に朝の陽が動く血糖値を下げて一日始まる

上田吟子

ためいき

・鳩

吾の上にするりと一本の弦おりてこの世ならざる楽をかなでる

どこにでも飛んで行きたい明日香の空蝶にもなりて鳥にもなりて

ひとりの死をききたる夕へおもかげも想ひ出さへも閉ぢこめておく

死といふはこんなに身近にあるものかうたがひもせず明日あるを待ち

ためいきをつくほかはなしひとり逝きまたひとり逝く夏うすさむき

心臓のカテーテルの手術中目ばかり光らず白いころもに

翌朝まで片腕固定されてゐて動きもならず眠りもできず

奥田清和

悼・浜田昭則君

・大

柏原宗一

制裁の効果

・羊

泰山のごとき歌びと忽然と四方結果に入るにぎみたまの魂

会誌編む縁の下なる力もち彼岸に足らへ敷島の道

願はくは杜甫・李白にも交はりて非線形など説きて遊べや

孔孟論・隋唐文化さりながら量子学理を説く仏顔

高段の素人棋士の君なれや作歌の暇は橋中の飲

情秀でうま酒足らひゑびす顔君は酔ひます須弥の仙人

巨星落つ秋野にすだく虫の音も君の黜いさまを称へるらし

奥田陽子

黒あげは

・羊

菊岡栄子

旅

・漣

黒あげはわれの脇よりひるがえり坂道はえごの花の真盛り

えごの花散りしく白さ坂を降り迷えるごとくしばし立ちおり

枯草の匂える路のほそくして曲ればにわか激つ瀬の音

左右の葦背丈を越ゆる木の道を歩みきたれり水音のする

川の面に葦草の灯の揺れて梅雨のひと日のはや暮れんとす

たずさえぬ携帯の音遠くして見知らぬ街のような日の暮

みどり児の髪をおもいて登りゆく合歓やわらかにある坂の上

小野雅子

残暑

・羊

草刈十郎

紫陽花

・世

蟬の羽一枚を蟻が運びゆくま上から陽の注ぐ地上を

蒸し暑さ膚にとどきてくる前にうごき出さむとガラスを磨く

風鈴の短冊まはるばかりなり強く風吹け音ひびかせよ

素麺を茹でる湯さへもすぐに沸く台所にも葉月の暑さ

足首の五センチさへも暑ければ短く折つてソックスを履く

医者でゐてあせもには桃の葉が効くと友の言ひにき木下に仰ぐ

大切ななにか忘れてゐるあした涼し気でなく涼やかと言ふ

「制裁の効果」は見えず五回目の核実験に踏み切つたこと

満面の笑顔が語る金正恩は国際社会の声をよそにす

五回目の核実験に笑顔して「制裁の効果」つひに見えずき

米国を標的にした北朝鮮 オバマ氏語る「強い圧力をかけるべきだ」と

中国の同意なしでは北朝鮮に中国企業を制裁対象にすると

日本独自の制裁はいづこにありや手詰りがある。東京はこの日も雨が

本日、北朝鮮に対する抗議決議を裁択することに合意した

友よりの親切身にしむ身となれりPSPに足はすくみて

足漬けの神事に先頭切っていく御手洗餅を食みし日遥か

友の為御手洗池に祈りしも今は我がため祈る日日なり

夫は言う人に頼らず生きて行けその一言が身に刺さりくる

車椅子押しくるる息子は生きていてくれれば良いと言うが愛しき

我がカード使つてくれと差し出せば息子は朝ご飯要らぬと言ひぬ

北海道へ息子の家族と旅をする我が車椅子を孫押しくるる

美しく庭に咲きたる百合の花鬼の名前を誰が付けしや

戦中を生ききて戦後七十余年悲喜こもごもの思ひ出あまた

生まれ来て運命なるかもや野良の眠つきしてゐる子猫のあはれ

雨に咲く紫陽花の色けふの色明日明後日七変化なり

シナリオのなき大地震震すでに千四百回余続くと聞けり

風光る古刹の池のあめんぼうあたりのしじまそこなはざりし

飛び回る蛍の群れや蛍火の音符のごとく闇に舞ふなり

## 國井節子

バトン

・春

ねこじやらし蚊屋吊草などなつかしみ畦道をゆく秋立つ朝を  
昨夜の雨草の葉先に止まれる万のダイヤを足裏に消しつつ  
しやくなげに三十六度は酷からむ古傘さしかけ気休めとせり  
打上げの花火の趣向変りたり夜空に跳ねる大和の金魚は  
体温並の猛暑にあへぐ病む人と室温下げて五輪観てをり  
草駄天の申し子かこの四人組バトン渡しうまさか光る  
蔓のばし高きに咲ける仙人掌なつの疎林に白すがすがし

## 小泉泰清

風神の力

・う

油蟬鳴き出す昼にゆるぎなき夏と思ひぬたくましき音は  
雨戸締めサッシュのガラス戸内に閉ち台風の夜静もるを待つ  
屋根ゆらし雨風荒び風神のたぎつ力か台風来たる

台風に稲穂重なり倒れしをコンバイン入れず拱きて居り  
わが地には台風きたるも雨風の窓辺打つ音荒ぶれるのみ  
夏の日沈む間際の茜いろ向かひの家のガラス戸光る  
妻とわれ熱中症を厭ひつつ冷ゆる緑茶を向き合ひて飲む

## 河野繁子

使者

・雁

あおじろき光をひきて流れ星落ちてゆきしほどの家のあたり  
夜空より急ぎの使者の降り来しにまわりは誰も見ぬ人ばかり  
流れ星近くに落ちしすさまじさ身の裡に棲み葉月の終わる  
あさ早く陰を選びて歩くみち零れやまさる葛のへに花  
ひとつずつ花びら落ちておち溜りくれないの地図いすこを踏まん  
膝いため二分多めを予測して歯医者への道おもだかの咲く  
うす雲の涅槃図ややにくずれつつ精一杯のひと日でありぬ

## 小西美智子

うつろい

・大

紅いろにかた頬を染めふっくらとおたふくなんてん梅雨に根づきぬ  
待ちいたる福島産の白桃を見つけ買いかぬ梅雨もあけたり  
台風の近づく真昼の街中をしおからとんぼどこへ飛びゆく  
なまめるき風にあおられ低くとぶしおからとんぼいすこより来し  
後発を待ちて座れる優先席かつてはなかりし「待つ」ということ  
気温二度下がれば脳もやすらぎて九月の予定などを書き込む  
紺いろのハワイ土産のTシャツを余韻を味わうごとく着ている

## 小林能子

子どもたちの記憶

・羊

疎開先転々の子が戻りきてその日に大岡川で泳ぎぬ  
桜木町まで帰れたと聞く安堵感あの日も電車は人を運びて  
「海賊の旗おつ立てて焼け跡に進駐軍が来た」とコージが語る  
学校も疎開も嫌だのコーちゃん「どくら隊旗」もヒミツのはなし  
焼け跡を乗り継ぎて品川「浜なべ」の駅売りあれば父にせがみぬ  
「わんたん」は陸さん直伝、配給の粉だけで打つ母の魔法  
「わんたん」は紙の薄さにてガラス板の上にはせはしく粉を打つ母

## 小山宜子

鶴

・詩

しなやかに山裾の縁踏みあゆむ丹頂鶴に桜ばな散る  
歩みゆく一羽の鶴に従きゆくはめをとの鳥か水面に映りて  
爪先の冷ゆる臥床にふと聴こゆ鈴虫ならむ盂蘭盆も過ぎ  
一年を過ごせるホームの味気なき暮らしに馴れゆく黄葉を拾ふ  
CDの歌に青春を憶ふ夜半伸べしかひなに抱くもの無し  
箱根より訪ね来し娘はシックなる黒のワンピースの腕をさし伸ぶ  
寂かなる夜半の隣室ざわめきて百歳の嬬逝きたる気配

## 近藤 栄 昭

赤城山

・福

山容を頭でなぞり乗っ越しへ空の狭まり尾根へ黒槍へ丸太みち足首ゆらず不安定乗りつく喜び体力はある福島の安積の山を思わせる涼風の尾根赤城駒ヶ岳新芽の白うぶ毛みじかき枝先に手を出しふれる魅惑に負けて地蔵岳にささくられて立つアンテナを見ぬふりに見る越後の清山わかさぎ井だせぬは原発事故のせいフクシマありたり赤城大沼放射線飛びかう山を登りたる汚染の現実赤城もフクシマ

## 近藤 芳 仙

痛み

・信

見て見ない他人のふりなり老いとふこと諧へは古稀すぎてをり七十路を越ゆる痛みのいくつあり死出の旅など思ふもひとつ六文をもちてゆくべき彼の世とは何処ぞ旗の六文銭ゆる夜半さめて冷蔵庫のたつる音を聞く仕事してゐむその音を聴く三十度右へ切りたるハンドルにひらけゆく視野浅間山が見ゆるふるびたる水琴窟の音を待つ地底の闇のその音をまつ昨日今日ふりつく雨に感謝して畑にのびる雑草を思はず

## 坂 上 直 美

孟蘭盆会

・天

孟蘭盆会今年いくたり喪いし山の送り火雨に煙れる香焚きぬ盆の終わりの朝の刻祖霊よしし休らいでいよ昨日今日炎暑少しくやわらぎぬ祖霊しずかに帰りゆきませ我が家も軒に灯籠吊るしけり京の下町昭和の半は祖霊見よ五歳の画家の傑作を五色の龍の灯籠に居る孟蘭盆会父の傍えに読経せり善雄善童子亡き兄のため来夏はしかと送らん祖霊たち大の字見ゆる家の窓より

## 坂 出 裕 子

百合

・洛

百合の花しろく揺れをり庭の面に猛暑の夏のひるを涼しく誰が植ゑしものにもあらず小庭辺のあちらこちらに白くかがよひ真夏日の光の中に白く咲く百合に独りの静けさありひとり咲きひとり散りゆく百合の花の孤独にこころ寄りゆくよりどころ見失ひつつ生くる日かはかなきものに励まされをりうなづきてゐるのか何に真昼間の風に揺れをり百合のかすかにかくばかりはかなきものに生きゆかむ力いたたく老いの日あはれ

## 佐 久 間 晟

山毛櫛(一二三)

・濟

わたくしから抜け出した私はひたすらに歩み続けるブナ森深くわたくしが漸く知った「無」なるものが私が九十年余のわたくしは私では無かったわたくしだ人生とはただの行脚だったのかわが終の遺蹟は何か思うだに虚しさのみのわれの一世に異界にてはまた甦ること聞くすべは「無」からと言うことなのかそれはただ空に向かってただひとり虚しき声に詠いしのみか見よ空より燦燦と降る日のひかりこれに包まれわれは生き来し

## 佐 久 間 ず ゑ 子

月の光

・濟

のがれたい思いでひまわりの花に真向かう。花びらが金色に光っている風に吹かれてエノコ草がいよいよやしている、草取りはもう止めよう庭に出た夫はどこを通ったのか、肩に付いた葉が低く語っている何となく今日も無事に過ぎた。沈む夕日をしみじみと見ている両手に掬った月の光。手の影がほんのりと床に映って夜がくる泥鰌鍋の季節になるとほころんだ香川師の顔がまた浮かぶ挨拶を交わして行った人。どうしても思い出せなくて眠れない

## 佐藤道子 夏

・甲

迎へ火の炎清らな森の中我より若き父母来ます  
 迎へ火に頭ちくる人の一人増え長く生き来し我かと思ふ  
 御先祖様の話し声とふ竹似草さらさらと鳴る信濃の山に  
 オリソビツク一色となるテレビジョン世界の闇を告ぐることなく  
 西へ来て力をつけて逆行す人のつくりし台風なるや  
 霧りなき白雲むくむく立ち上り緑豊けし浅間山麓  
 朝採れの胡瓜に無添加糞みそ自然の贅沢信州信濃は

## 鈴木結志

選手魂

・福

リオ五輪日本水泳金一号萩野を称う歓声止まじ  
 新月面宙返り技航平の鉄棒着地微動だにせぬ  
 三回半ひねり跳馬の新技を生みて白井が五輪を飾る  
 団体の男子体操日本の演技をそらいて世界を制す  
 練り技の球の応酬目も奇に卓球準が許听を下しぬ  
 バトンパス見よや神技日本の陸上リレー銀にかがやく  
 バーベルに頼すり成功感謝する三宅選手の心いじらし

## 世木田照比古

とかげ

・茜

じわじわと背筋に迫る思いあり同年配がまた一人逝く  
 友が逝きライバルが逝き復活の果たせぬままにまた夏がゆく  
 猛き陽を鋭く返し銀色のとかげは我を追い越して行く  
 脚を灼く舗道を馳せる大とかげ列車へ急ぐ我と競いて  
 女性の脳の特徴を聞きて品選ぶ妻の買物を耐えて待ちおり  
 我が県の代表校の消え去りしテレビを切りて盆支度する  
 新聞を何度読んでも読み足らずカーブ奇跡の逆転を成す

## 関根榮子 言葉

・埼

梨畑の落ち梨甘く匂いおり青松虫の鳴き声はげし  
 日の落ちを待ち出て出で来し店先に「暑いですわね」と今日何度目か  
 先延ばしすること多し「暑さは愚鈍にする」とアランの言葉  
 帰省車の渋滞避けて農道を行けばお盆は故里回帰  
 辻に置きし胡瓜の舟や茄子の馬御先祖様はいずれを選ぶや  
 浴衣着て送り盆に行きし日はるかローソクの灯の墓地の不夜城  
 丈高く茂る荒草の道に受ける熱風というより熱波がふさう

## 関根和美

栗まん

・埼

門脇の萩をかきわけ宅配の今朝は背たかのっばが顔出す  
 口開けば雨水の入る虫の入る目覚めてまずは無花果をとる  
 日本語のリズムを笑うダニエルがいつももち出す「落っこっちゃった」  
 栗まんの茶色のかてかてかとおしくまずはずはひとなでそして頂く  
 江ノ島の蛸せんべいとやほんのりとたこやき風味紅しょうがが入る  
 「超でかい」「あれはスパーマンだよ」通りすがりの会話に見上ぐ  
 ただいまとわれに触れくる夫と子のあまりに似たる仕草のおかし

## 久我田鶴子

はがき

・羊

松と鶴、亀を加へて完璧とはがきが届く亀の絵そへて  
 描かれし亀は寒色ばかりにてけれどお茶目な瞳をして笑ふ  
 亀とくりややはり兎かミッフィーのシールを貼りて返せりはがき  
 変はらないやうで変化は少しづつミッフィーとわたし同い年なる  
 表情なきうさぎの口のバッテンがくちにはしないおもひを告げる  
 甘夏のハチミツの金いろ濃くて鴨川のひかり溜めあるらしき  
 銀鼠や桜鼠なる雲のいろおとうとと並び見し日あらずや

## 神田通信

### 【総務部】

■今年のカレンダーも残すところあと僅かとなりました。来年の全国大会の準備も進んでいるようです。来年は例年より早い四月開催とあって、来月号には大会案内が掲載されます。四月十六・十七日、姫路。今からご予約ください。

■七月に亡くなられた浜田昭則さんが管理して下さっていた地中海のホームページ。なんとか後継の目途がたったと喜んでいた矢先、九月末でプロバイダーの契約が切れ……と、牧さん、浜田恭江さんが動いてくれましたが、浜田さんが作り上げてきてくれたものを引き継いでいけるかどうか。できるといいのですが。(柏原宗一)

### 【編集部】

■九月十四日(水)今号の編集作業。午前中に割付を終えて待っていると、出来上がったばかり

の十月号をもって、京成社の社長さんが原稿を取りに来てくれました。わーお、早い!

■会議では、作品や歌集の批評のあり方が話題になりました。作品を理解し味わうこと無しに批評はできない、と。褒めるばかりでなく、問題点の指摘も必要なことですが、書かれた人、あるいはそれを読んだ人にとって、その後の作歌の励みになるようなものであってほしい。具体的に作品を挙げもしない全否定的な発言は、いかなるものでしょう。批評は必ず、書き手自身に戻ってくるものですし、書いたものは話し言葉と違っても残るものであることも心に留めておきたいことです。

■今号、責任編集のページが二年ぶりに戻ってきました。今回は高尾恭子責任編集。「モノ語り」というテーマに四人の書き手が挑んでいます。四人四様、それぞれの語りをお楽しみください。社外からは倉田剛氏にご寄稿いただきました。ありがと

うございました。

■歌集批評は、上石幸子歌集『母の子守唄』。誌面で読んでいられるよりも作者がぐっと近く感じられる、それは歌集を読む喜びのひとつではないでしょうか。

■十一月は、宮終二記念館全国短歌大会で新潟に行きます。月末には鹿児島へ。それいゆと鹿児島支社の「忘年うた会」に藤田美智子さんとお邪魔します。九州の皆さんとお会いできるのを楽しみにしています。

(久我田鶴子)

◆昨日までの暑さがウソみたいに気温が下がりはっきりと、東北の友より電話、朝は暖房を入れたと。日本は広い。(朝)

◆机の上に秋の味覚。葡萄、茹で落花生など。皆さんの心尽くしです。外は涼風だが曇天。明日は中秋の名月なのに。(和)

◆こんなに辞書を引いたことはありません。改めて作品をじっくり拝見しました。批評担当者の真摯なことばです。(磯)

◆台風と大雨の被害がひどい。

私の住む市内でも浸水被害があり、水道も一時ストップ。怖い思いをしました。(陽)

◆昼間、ある町の喫茶店に入ったところ席はほとんど高齢者で占められていて驚いた。自分の無知にも。時代かな? (聖)

◆話題の「君の名は」を観た。夕方館内は高校生で満席。志半ばで絶たれた少女の命は君たちが繋いでいくのだよ。(高)

◆写真歌合わせの歌が五十通近く来ている。みなさん楽しく詠まれていて遊びの場として活用していただければ嬉しい。(彦)

◆「難しいことを難しいことの中で考えていくしかない」と被曝の牛飼育を続ける福島「希望の牧場」の古沢正巳さん。(浜)

◆棚田の一面にソーラーパネルが並ぶ風景と出会った。周囲の田が太陽光の影響を受けるのだと聞き、複雑なおもい。(槍)

◆「授業をしているからか、この頃生き生きしている」と家人に言われる。久しぶりの中学校の現場。やはり楽しい。(藤)